第37号発刊に寄せて

本号には，広島大学の各研究科等の教員と11の附属学校園教員が共同で教育に関する諸課題の追究に向けて取り組んだ成果が凝縮されています。このたびの新学習指導要領に見られるように学校教育では教科の学習に重点が置かれるようになってきています。また，学力の国際比較から日本の児童生徒は学んだ知識・技能や概念を活用する力に課題があることも提起されています。我々はこのような今日的課題のみならず時代をこえた普遍的な教育課題への挑戦を続けてきました。

教育実践研究を行う場としての附属学校園にとって近未来の教育のみならず，さらにその先の教育についても模索を続け，その成果を世に問い続けることは重要な使命の一つです。広島大学の附属学校園は言うまでもなく広島大学の一員であり，各研究科等の教員の方々と共同で研究を進めることができます。先進的な教材や指導法についても実践を通した検証が可能です。共同研究は理論と実践の融合が図られることであり，研究科等と附属学校園の教員双方にとって大きな利点があります。幸いなことに，このような点についての理解が全学的に深まっており，本紀要の号を重ねる毎に多くの研究提案を頂くようになっています。今号では重点テーマ７件，共通テーマ９件，一般テーマ48件，合計64件の研究報告を掲載しています。いずれにも教育に対する熱い思いや期待，さらには未来の日本を担う若い世代を育てたいとの願いが溢れています。これからも学部・附属共同研究への課題応募が増えていくことと思いますが，それは附属学校の教育と研究の拡大と深化，また本学全研究科教員の方々の教育への関心と共同研究の裾野が拡大していくことに他なりません。

このような状況に鑑み，本号に綴られた研究成果が附属学校はじめ全国の学校において，より円滑に活かせることを願い，著者の方々には，よりコンパクトな論文執筆と論文要旨をお願い致しました。本号から新たに論文要旨の部を設けましたので，全64件の要旨が一目で縦覧頂けると思います。このような新しい誌面構成にあたり，併せて表紙のデザインも一新致しました。

附属学校を取り巻く今後の状況は決して安寧ではありませんが，学部・附属共同研究が一層活性化し，我が国の教育の発展に寄与できることを祈念してやみません。

本号は広島大学附属東雲小学校および同中学校が編集を担当致しました。多忙な校務の中，大松恭宏，島本靖両副委員長，委員の秋山哲，神原一之両主幹，土井徹，鹿江宏明両研究部長，および両校の研究部の教諭各位，さらに附属学校支援グループの内藤雅美グループ員にも大変お世話になりました，これらの皆様に深く感謝致します。

平成20年３月24日

平成20年度編集委員会委員長
広島大学附属東雲小学校・中学校　林　　武　広